

「四輪」でいい冬季五輪

ソチ・オリンピックの開会式で五輪のイルミネーションがうまく光らず、一時、四輪のようになってしまった「事故」があった。ロシア側の責任者は「ミスはミス。でも誰にも迷惑がかかっていない」と冗談を飛ばして記者団を煙にまいた。

笑って終わりにしてもいいが、一瞬これが意図的だとしたら、どうなただろうかと考えた。五輪開会式をテロ騒ぎではなく、技術的ミスにみせかけて話題を集めたとすれば相当な知恵者だ。これは不完全な五輪なんだよ、という「皮肉たっぷりのメッセージ」だったからだ。

近代オリンピックの第一回大会は1896年にアテネで開かれた。その時点では「五輪」はなかった。第一次世界大戦からしばらくたった1920年のアントワープ大会から、五輪マークが制定された。ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、アジア、オセアニアの5つだ。

平和の祭典を象徴する五輪マークはあつという間に世界中に広がった。その後、オリンピックは日本語で「五輪」といわれるようになった。ここまでは誰もが納得する心地よい話だ。

ところが五輪には北半球に住む人が気づかない「罫」がある。2014年ソチ冬季五輪の参加国は87カ国だった。前回バンクーバー五輪は82カ国だから5カ国増えた。しかし12年ロンドン夏季五輪の参加国はなんと204カ国である。つまり夏季五輪の半分以下しかソチ

五輪に参加しなかったことになる。

これはいったいどういうことなのか。冬季五輪は南半球のラテンアメリカ、アフリカ、中東、アジアなどの国には無縁の大会だったのだ。「オリンピックは参加することに意義がある」などと偉い人にくら講釈されても、はいそうですか、というわけにはいかない。

冬季五輪に参加する意思がなかった国からすれば、「あの五輪は何だ」ということになる。スキー、スケートができない国では、ウィンター・スポーツ自体が知られておらず、当然選手もいない。そもそも、北半球で極寒の2月は南半球では真夏だ。ブラジルでは2～3月はリオのカーニバルの季節だから、五輪どころではない。常夏のカリブ諸国や東南アジアではみんな海水浴を楽しんでいる。

そんな国が初参加すれば、活躍してもしなくても必ず大きな話題となる。ソチにはドミニカ国、トンガ、ジンバブエ、トーゴなど雪の無い7カ国の代表がやってきた。

ひと昔前、「クールランニング」という南国ジャマイカのボブスレー・チームが冬季五輪で大騒ぎするコメディタッチの米映画があった。その映画を地でいくようなボブスレー・チームが実際に参加してきた。旅行費用をやりくりし、カリブ海からやっとの思いでソチまで来たという。

夏の五輪では、ジャマイカはボルト選手をはじめ陸上短距離が強く、ソリを押す速さとパワーが必要なボブスレー向きと思われた。

しかし、結果は棄権したチームより1つ上の“ブービー賞”に終わった。

「不完全な五輪」と書いたが、長い間、冬季五輪やジャンプのワールドカップなどをチェックしていると、ウィンター・スポーツの「影」の部分がよくわかる。冬季五輪の関係者は本来なら参加国をもっと増やす努力をすべきなのに、どうも新参者に対する「寛容の精神」が欠けているように思う。

16年ぶりにメダルを獲った日本の男子ジャンプ陣などはルール変更にも悩まされ、苦勞してきた。フィギュアスケートの技ごとの「基礎点」も不透明極まりない。でも審査員ににらまれることを恐れて、各国の選手やコーチはいっさい批判しない。しかし、ネット上では採点競技の不明朗な点数について疑問や批判が渦巻いている。

ウィンター・スポーツ好きには叱られそうだが、もともと冬季五輪は世界全体を網羅しておらず、「四輪」といわれても仕方ない面がある。だから今回の開会式のハプニングは何か奥深いことを暗示しているようにみえた。

平和を願う世界にもっと冬のスポーツを普及させるにはどうしたらいいか。たとえば雪の多いアルゼンチンのアンデス山中で「南米初」の冬季五輪を開くのもひとつの手だ。もちろん北半球では7～8月の真夏の開催になる。最強の北欧勢、そして欧米、日本なども苦戦しそうだが、それもまたおもしろい。

品がない「フラジャイル5」

「フラジャイル5」という訳のわからない言葉が金融界に流布している。「脆弱な5カ国」という意味の英語だ。自国通貨が弱い国の代表格を並べたつものようだが、マスコミが取り上げる回数も増え、放っておけなくなってきた。

その5カ国とはブラジル、インド、インドネシア、トルコ、南アフリカだ。これを見ると、何かの国家群と重なっていることがわかる。実はブラジル、インド、南アの3カ国は21世紀の成長国としてもはやされたBRICSの面々である。

とりわけブラジルやインドの評価はジェットコースター並みの急上昇、急降下だ。こういうのを日本語では「マッチポンプ」（マッチで火をつけ、騒いだ末にポンプで消火する自作自演行為）という。

BRICSは2003年に米ゴールドマン・サックスが名付けた世界の有望国だ。ブラジル、ロシア、インド、中国の4カ国で、最初はこれを「BRICs」と呼び、その後南アの「S」を入れて「BRICS」と書き換えた。複数を意味する「s」を大文字の「S」に格上げしたのだ。

BRICSの造語には実はおかしいところがあった。英フィナンシャル・タイムズ紙もその点を鋭く指摘している。ロシアはすでにG8のメンバーだし、成長する新興国という意味では失格である。また中国は共産党1党独裁だから、ほかの民主主義国と同列に論じられない。

だから残ったブラジル、インド、南アの3つの民主主義国をひとまとめにしたらい、と同紙は主張していた。ところが、その「ひとまとめ」があろうことか、「フラジャイル5」への仲間入りとなった。当該国は頭を抱えているに違いない。一夜にして「成長国」とは正反対の「通貨警戒国」になってしまったのだから。

BRICSの成長力に陰りがみえ、存在感が薄れてきたのは事実。それに伴い世界の金融界はBRICSに代わる新興国の組み合わせを探した。このままでは相場を動かす材料に乏しいと、考えたのだろう。

「IBSA」（インド、ブラジル、南ア）がいいだろうと言ったのは英国だ。「VISTA」（ベトナム、インドネシア、南アフリカ、トルコ、アルゼンチン）は日本のエコノミストの造語。「NEXT11」はゴールドマン・サックスがBRICSに続く2匹目のドジョウを狙って打ち出した新興国グループだが、これはほとんど無視された。

親日国というくくりで「VIP」（ベトナム、インドネシア、フィリピン）という風変わりなグループも登場した。そんな中で比較的まともなのは「MIKT」（メキシコ、インドネシア、韓国、トルコ）だったかもしれない。

何年か前に「PIIGS」（ピーグス）という言葉を発見したときはいったい何が起こったのか、とびっくり仰天した。ブタは欧米では誰もが知っている蔑称である。

ポルトガル、イタリア、アイル

ランド、ギリシャ、スペインの頭文字を並べるとこうなる。欧州経済危機で最も深刻な状況に追い込まれたラテン系中心の国々だ。要するに「欧州の劣等生」を意味するが、いくらなんでもブタはないだろう。

欧米や日本の新聞は「PIIGSと呼ばれる……」などと平気で書いていたが、その後、多くの銀行・証券が「不使用」を決め、「GIIPS」（ジープス）と言い換えた。

そして今、世界の金融界はPIIGSのときの「悪乗り」「やりすぎ」を忘れ、またも南の国に向かって「フラジャイル5」などという悪口を言い始めた。

ドルに対する通貨が弱い（切り下げスピードが速い）ことに加え、成長の可能性が減ったと言いたいのだろうが、仮にそうだとすると、わざわざ「脆弱な」という形容詞をつけることはない。

しかも通貨の強弱、景気だけで国を判断するのはあまりに単純。政治的に「フラジャイル」の国は数え切れないほどある。アジア、欧州、中東をちょっと眺めるだけでも多くの国が当てはまる。むしろそうした国々を「フラジャイル・プラス」として採り上げてみてはどうか。

金融界は語呂合わせをしている場合ではない。もっと政治、外交を踏まえて成長性を論じる本質論を展開してもらいたい。
（日本ブラジル中央協会
常務理事 和田 昌親）

